

硫黄島の奇跡

白骨遺体に巻かれたゲートル

Takao Yamamoto

山本孝夫



母が彼の無事を祈って
縫い付けた名前。
それが奇跡をうんだ——。

文芸社セレクション

文芸社◎定価(本体600円+税)

著者プロフィール

山本 孝夫 (やまもと たかお)

1932年、山口県萩市生まれ、高校教員。
2012年、『杏林の坂道』（私家版）出版。
現在、山口県山口市に在住。

カバー写真：上野達雄

硫黄島の奇跡 白骨遺体に巻かれたゲートル

2020年3月15日 初版第1刷発行

2021年5月10日 初版第2刷発行

著者 山本 孝夫

発行者 瓜谷 網延

発行所 株式会社文芸社

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-10-1

電話 03-5369-3060（代表）

03-5369-2299（販売）

印刷 株式会社文芸社

製本所 株式会社MOTOMURA

©Takao Yamamoto 2020 Printed in Japan

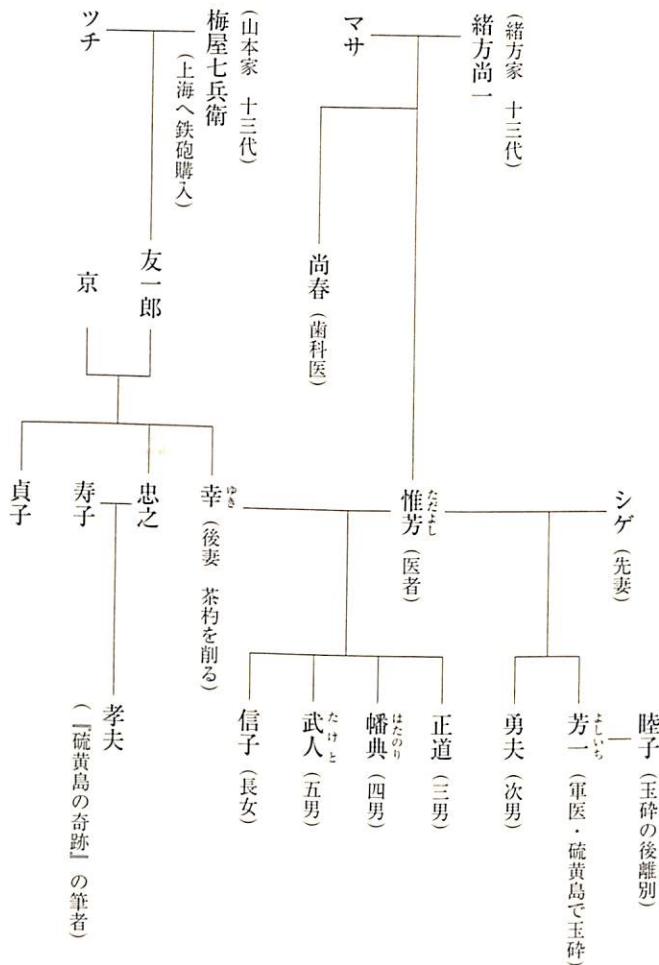
乱丁本・落丁本はお手数ですが小社販売部宛にお送りください。

送料小社負担にてお取り替えいたします。

本書の一部、あるいは全部を無断で複写・複製・転載・放映、データ配信することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

ISBN978-4-286-21462-7

「硫黄島の奇跡」人物相関図



あります。また兄が話していましたが、運動部の活躍も素晴らしく、県下の他の中学校から「萩中とはもう勝負をしたくない」と敬遠されていたそうです。つまり「文武両道」に輝いていた時期だったと聞いています。昭和48年に「萩高創立百周年」を記念して作られた卒業生名簿を見ますと、昭和7年の卒業生96名の内逝去者は48名で、その数の多さに驚きます。その時点で生存者が還暦に達しておられないことから考えると、その多くは戦争の犠牲者だと思えます。思えば、これらの先輩たちの多くが、先の戦いで国や同胞のために尊い命を捧げられたのです。

このような輝かしい伝統を受け継いで来ました母校が、今後益々発展しますことと、同窓生の皆さまのご多幸を心よりお祈り致します。

最後に、長年の念願でした慰霊巡拝を終る事が出来まして、やっと戦後に一区切りが付いた思います。拙い文章を長々と書きましたが、平成の今日、戦いの無い平和の尊さを本当に有難く思います。

緒方正道 (萩中第45回・昭和20年卒)

序

緒方芳一の戦死の公報が入ったのは、昭和二十年十月三十日である。父惟芳はこの公報を聞くことなく、同年の九月に往診先の隔離病舎で突然倒れ、三日後の九月十四日に不帰の客となった。今から思うと六十二歳の老いの身であった。公報と同時に厚生省から一包みの木箱が送られてきた。骨壺と白木の位牌が中に入っていた。全く無記名の位牌である。家族一同これを見て、芳一の遺体はまだ発見されずに、硫黄島のどこかに眠っていると思うのであった。

終戦から七年経った昭和二十七年のことである。「第一次硫黄島戦没者遺骨収集」の際、芳一の遺品が発見されたという記事が新聞に載った。その後しばらくして、彼の母の下へ『従軍手帖』が送られてきた。送付された手帳は縦十三センチ、横七センチ、厚さわずかに一センチの、黒色のカバーで覆われた掌の中にすっぽりと収まるほどの小さなものである。奇跡的に発見されたこの手帳は、硫黄の臭いの立ち籠める洞穴内で少なくとも七年間、人間には耐え難い熱暑にさらされていたのである。表紙の一部に焼け痕がありボロボロの状態であった。

3 序
表紙に日本陸軍を表象する星印、その下に「従軍手帖」と書かれていて、手帳の最後の頁に世界地図が印刷されていた。その地図の下の欄に、「昭和20・Jan・7、於小笠原

群島硫黄島受領—よしいち、O g a t a i—とあった。

まぎれもなく芳一のものである。母はこの手帳を掌中の珠のように手にとって、おそるおそる表紙を開いた。傍らにいた芳一の弟の正道は、その中に書かれた兄の記述を母にゆっくりと読んで聞かせた。

3月1日

敵ハ中央突破ヲ企テ硫黄島神社ニ迫ル 9中隊ハ未ダ本部隊新陣地ニ就カズ 本部隊ヨリ急伝令空爆下ニ急ヲ伝フ 時ニ7時ソノ后電話切断状況全ク解ラズ 空爆艦砲極メテ熾烈医務室ハ孤立シ万一ニソナヘ歩哨ヲ立テ各人ニ手榴彈ヲ渡シ待機ス夕刻例ニヨリ彈雨粗トナリ本部ト連絡スルニ敵ハ中央ヲ突破シ軍医部ニ迫リ衛生隊ト連絡タタレ爾後患者ハ全部自隊ニ收容ノ事 我ガ隊ハ敵前五百米トナル 今夜ハ斬込ミ隊モ我ガ隊ヨリ出ルトノ事ナリ 恩賜ノ煙草兵ニワタリ下給品若干ワタル夜ハ近來ニナク静カナリサレド時折照明彈、焼イ彈艦砲飛ビ黃燐燃ユ 状況ハ極メテ我ニ不利 四月頃守ル事ガ出来ルダロウカ 兵ノ士氣ハ平素ト変リナシ 各兵内ニ覚悟ヲ秘メ平靜ニシテ静カナリ

不思議ナホド静カナ夜 故郷ノ我ガ家新聞ラジオ等ヨリ定メシ心配致シオル事ナラントフト思フ 兵等口々ニ云フ、名モナキ戦線ニテ死スヨリ主戰場硫黄島ニテ玉碎センハ幸ナリト 小サイ声ニテ軍歌ヲ唄フ 患者アリ

ソレツ しょうばい しょうばい

第二次硫黄島戦没者遺骨収集団は昭和四十五年三月六日に帰還した。その時「山口県関係者 緒方芳一氏の遺骨を持ち帰った」として下記の報告書が提出された。

北観音から約10mか20m行った処とアスファルト道路から約5〜6m行った処に洞穴があった。そこは米軍の爆破で跡形もなくなっているが、その横に別に穴があり、この穴は45度の傾斜で掘り下げられている。洞穴内は無数の支洞からなっており、本名が発見された処は入口から少し入った処に上の方に向かって縦穴があり、それを昇ると6畳くらいの部屋ができている。同所は通信隊がいたらしく無線機等が散乱していた。本名は部屋の入口付近において、宮崎県出身者、独立混成314大隊陸軍兵長故持原春吉氏と一緒に並んで死亡していた。当時の状況からして自決したのではないかといふ事が推測される。なお、遺体はズボン（軍袴）に巻脚絆をつけ生存当時の姿のままに横たわっていた。氏名は巻脚絆に本名のネームが糸にて縫いつけられていたことより確認されたものである。

5 序 緒方芳一は三十歳の時召集を受け、陸軍軍医として硫黄島に行き、その翌年洞穴において手榴彈で自爆玉砕した。洞穴内で彼の軍隊手帳と、白骨の遺体に巻かれていたゲートル

が見つかった。わずかに焼け残っていたそのゲートルの小片に、「オガタ」の文字が縫い付けられていたので、その遺体が本人のものだと判明した。これはまさに奇跡だと言えよう。

周知のように激戦地硫黄島では遺体が本人だと判明した者は極めて少ない。いやほとんど皆無と言ってもいいのではなからうか。そうした状況下で本人の遺体が発見収集されたのは、重ねて言うが奇跡以外の何物でもない。

ゲートルと言っても、今の人にはすぐには分からないのではなからうか。最近たまたま友人から『木原静馬 遺句集』なるものを頂いた。その中に次の二句があった。

身に入むや 戦後派知らぬ 巻脚絆

敗戦忌 姿を消した 巻脚絆

作者は太平洋戦争に従軍し、無事帰還された後、好きな俳句を始められたようである。緒方芳一も生きて帰ることができたら、医療の傍ら、好きな文学を楽しんだことであろう。彼は硫黄島から家族に宛てて数多くの手紙を書き送った。その中には文学に言及したものが沢山ある。あれから七十五年が過ぎた。わたしはこれらの遺品や手紙を目にして、

彼の硫黄島で玉砕するに到るまでの軌跡を辿ってみようと思ったのである。

硫黄島洞穴内で見つかった芳一の遺品（従軍手帖と巻脚絆の断片）



目次

序	3
第一章 村医となつた父	10
第二章 硫黄島までへの道	54
第三章 硫黄島からの手紙	82
第四章 惟芳の死	134
第五章 鎮魂の茶杓	144
第六章 硫黄島慰霊巡拝	156
あとがき	168